

実験句会の顛末

今泉 而云

NPO 双牛舎の本業

俳句の初心者・未経験者への手ほどきは、どんな方法がいいのか、というようなことを、長らくぼんやりと考えていた。いつ頃からか、と言えば二〇〇七年四月、大澤水牛さんとともにNPO法人双牛舎を創立した時から、ということになるだろう。

NPOの日本語正式名は「特定非営利活動法人」という。非営利、つまり利益を求めないことを条件に、国や自治体から法人格を認められた団体である。儲けを出して会員に分配するようなことは許されない。しかし有形無形の利点もあり、事業をするにあたって信用が得られやすい、というようなこともその一つと言えるだろう。

双牛舎の設立時、NPOとしての目的を「俳句の振興・普及」とした。都の担当者によると「俳句関係のNPOは全国初」ということで、「珍しいNPOだから頑張ってください」と言われ、いろいろと親切に教えて頂いた。

提出書類の「目的」の項には、「俳句の普及・振興」とだけ書いたが、

ふと思いつ出したのが、幕末・明治初期の著名な宗匠・穂積永機の編集した「俳諧自在」という俳句指導書のことであった。後の時代の文芸評論家がこの書について「永機はバカな書をつくったものだ」と揶揄していた。けなされ方が酷かったので、逆にどんな内容だろうか、と興味を持ち、奈良の古書店から送料込み三千七百円で手に入れていた。

古い聖書を思わず分厚い書であった。さてその内容である。古今の名句の五・七・五を四季別にばらばらにしたものが各頁を埋めていた。それらから句の一部を自分の好みで拾い上げ、五・七・五に並べていけば一句出来上がり、という仕掛けである。他人の句の断片を集めて自分の句にしてしまうのだ。現代的な俳句観からすれば、批判されても仕方がないだろう。

しかしある俳句辞典を読んでいて、いくらか気が変わった。明治末期に興った新傾向俳句の旗手・荻原井泉水は「俳諧自在」で俳句を学び、一高に入ってから一高俳句会を立ち上げたという。俳句の理論家として知られ、種田山頭火や尾崎放哉の師であった。「俳諧自在」も捨てたものではないかも知れない。

この書の作句手法は、明治から昭和初期あたりまで庶民の間で流行していた「冠句」「折句」「割り句」など、ゲーム的な句作りに通じるものがあるようだ。それらは俳句会の余興として行われていた。句会の終わる頃を見計らい、余興の時にだけ姿を現す人もいたという。

担当者から「もう少し具体的に」と助言を受け、その場でいくつかの活動を捻り出した。第一が「インターネットによる俳句情報の発信」である。そのほかに「初心者指導法の研究」も加えていたので、いずれはそんなことも始めよう、と思っていたのだ。

何年か後、上智大学柔道部の仲間頼まれ、俳句の未経験者を集めた三四郎句会をスタートさせた。次第にメンバーが増え、なんとか句会らしくなってきたが、初心者の指導法を特に意識したことはなかった。メンバーの皆さんが自然に上達してきたので、それで十分、という気持ちになっていた。

二〇一六年の初め、三四郎句会の宇佐美論氏から相談が持ち込まれた。「上智大学法学部の同窓会で初心者・未経験者を対象にした俳句の話をしてもらえないか」ということである。三四郎句会の場合は積極的に俳句をやりたいという人ばかりだったが、こちらは「ちょっと興味がある」という程度の人が多いようである。

どうすればいいかと、宇佐美氏と話し合っているうちに「ゲーム的な句作りをやってみようか」ということになった。俳句の未経験者でも軽い気持ちで参加してくれそうだし、NPO創立当初に掲げた「目的」の一つに適合することにもなる。問題はいかなる「ゲーム」を行うかだろう。

穂積永機の「俳諧自在」がヒント

ゲーム的句作りを簡単に説明しよう。「冠句」は、上五を例えば「古池や」と定めて句を作る。「折句」は例えば「平和」という題を出し、「へい、わ」を上五、中七、下五の頭に置いて詠む、というようなものである。私の叔父（伊佐野三舎という俳人）は、このような遊びの句作りが得意だったそうで、「遊びのつもりで気軽にやっているうちに、俳句を詠む力が自然に付いてくるものだ」と言っていた。

法学部同窓会の人々は俳句の未経験者が多いようだから、気軽に出来るものがないと考えると、以下のような問題を五つ作ってみた。上五、下五（季語）を決め、真ん中の「中七」を埋めていただくことになる。投句は一人が一句から三句までとした。

問題 上下の語の間に七音の語（五七五の「七」）を入れ、句を完成して下さい。

- | | |
|--------|---------|
| 橋の上（ | ）朧月 |
| 古池や（ | ）しゃぼん玉 |
| くたびれて（ | ）猫の恋 |
| 世の中は（ | ）山笑う |
| 超高層（ | ）チューリップ |

季語（下五）に「しゃぼん玉」「猫の恋」「山笑う」を入れたのは、このような季語もあることを知ってもらいたいたためであった。法学

部OB会の方々は果たして、どのような語を入れて句を完成させるのだろうか。日経俳句会の皆様も気軽にやってみて頂きたい。

伝統的な句会も体験

上智大学法学部同窓会の「実験句会」は一六年二月二十五日夜、東京・紀尾井町（四ツ谷駅前）の上智大学2号ビル十三階・法学部大講堂の一部を使って行われた（実験句会の前に俳句に関する講演を行ったが、省略）。参加数は当初、二十人くらいと見られていたが、当日はインフルエンザの影響などから欠席者が増え、十一人の会となった。

開始時間の二十分ほど前に会場へ行くと、二人の方が待っており、頂いた名刺によると「上智大学法学部同窓会会長」の辻伸行氏と「同副会長」の矢島基美氏である。辻氏は元法学部長だという。同窓会の中核の方が俳句に関心を持っておられるようである。

やがて番町喜楽会の田中博さん（俳号・白山）上智大ドイツ語科卒）、同じ番喜会の横山恭子さん（上智大心理学科教授）も来られた。横長の机を長方形に並べ、そこに十人ほどが並ぶことになる。久々に大学のゼミに出たような、懐かしい気持ちを感じた。

私が上智大学（ドイツ文学科）を出たのは一九六二年（昭和三十七年）だから、もう半世紀以上も前のことだ。法学部が発足したのは入学の年であった。五階建ての新しい法学部ビルが完成し、その地下に柔道場ができた。私は毎日のように地下道場に出掛け、

学業はほったらかしで、柔道に熱中していた。現在はその校舎が取り壊されて、堂々たる超高層ビルに変わっている。

日経俳句会、番町喜楽会の支柱である大澤水牛（水紀雄）さんは、私と同じドイツ文学科の一年先輩だった。水牛さんは卒業して日経新聞社に入り、私もその後を追って、日経在職中に俳句を始めたが、退職して現在に至るまで、水牛さんは当然ながらずっと私の一年先輩である。水牛さんにこの日のことを伝え、出席を依頼したところ、別の俳句勉強会があるので、残念ながら出られない、ということであった。（本項に続いて水牛氏が、ご自身の勉強会に関連した一文を寄せている）

さて、実験句会である。上五と下五の間に「中七」を埋めるというのだから、遊びの部類に入るだろう。皆さんそれぞれに興味を持たれたようである。当初は一人が一句か二句と踏んでいたが、二句、三句と作って行く人が多い。時間が来て短冊を集めたところ、ほとんどの人が三句作っておられたようだ。

実はこの辺で私が優秀句を選び出し、披露して実験句会を終えようと思っていたが、まだ時間が残っていたので、急ぎよ、清記や選句も行うことにした。パソコン利用が普及し、若い人たちの俳句会ではメールによる投句、選句表配布などが一般的になっている。やがて消えて行くと思われる伝統的な句会を体験して頂くのも一興と考えた。

短冊に句を記入し、短冊を用紙に清記していただき……、選句・

披露（選んだ句を読みあげる）といった句会を慌ただしく行って、実験句会はともかく終了した。高点（4点、3点）の四句と私の選んだ注目句は以下の通りである。

◆高点句

くたびれて家路は遠く猫の恋
橋の上人待ち顔の朧月
世の中はマイナス金利山笑う
橋の上定年迎え朧月

辻 伸行
多賀 京子
石丸 雅博
石丸 雅博

◆注目句

橋の上つかみそこねた朧月
橋の上ゆらりゆらりと朧月
橋の上煙草のけむり朧月
古池や蛙が見てるしゃぼん玉
古池や水面にふわつとしゃぼん玉
古池やゆるりと踊るしゃぼん玉
くたびれてあくびしている猫の恋
くたびれて妻は寝ており猫の恋
くたびれていずこに消えた猫の恋
世の中はそんなものだよしゃぼん玉
世の中はめぐりめぐりて山笑う

世の中は花粉症だらけ山笑う

超高層土の香知らぬチューリップ

超高層見える窓辺のチューリップ

番町喜楽会の田中白山さん、横山恭子さん、三四郎句会の宇佐美論さん、それと多賀京子さん以外は俳句の未経験者の方であった。それにしても、なかなかいい句が揃ったと思っっている。最も気に入ったのは「世の中はマイナス金利山笑う」であった。こういうところに「マイナス金利」はなかなか思いつきにくく、とても面白い時事句だと思っった。

もう一句、「世の中はそんなものだよしゃぼん玉」を挙げたい。この下五は、課題では「山笑う」なのだが、作者はおそらく勘違いされて「しゃぼん玉」にしてしまった。ところがしゃぼん玉はすぐに壊れてしまうので、「世の中はそんなものだよ」と実にうまく合っている。また本来の「山笑う」を下五に置いてみても、「面白い句になっっていた」。

法学部同窓会の「実験句会」は無事に終了した。参加された方々がこの後も、俳句に興味を持ち続けて頂ければ大いに有難い。それとNPO双牛舎の掲げた目的の一つ「初心者指導法の研究」のことがある。最初の「実験」は「成功」と見ていいだろう。これを機に本格的な研究に取り組もう、と考え始めている。